

家庭医療専門医資格取得者の現状把握調査調査報告書（ウェブサイト公開用）

2021年10月

調査代表者：専門医部会キャリア支援部門 合田建

調査分担者：同上 朴大昊、村田亜紀子

<調査背景>

2010年から開始された当学会の家庭医療専門医制度は10年を迎え、2020年10月時点での専門医総数は874人とまだ不十分な数ながら蓄積した経験がある。しかし、これまで専門医資格を取得した者たちの特性を十分に分析し、データを活用した専門医のキャリア支援が行われてきたとは言えない。

専門医資格の維持・更新については、これまで更新に必要なポートフォリオの領域に関して勤務先によって経験できないものがあることを指摘する意見がみられている。また、先日キャリアCafé2020（学術大会 Online）で開催された「専門医、どうする？手放す？」という集いに14人が参加し、専門医更新を躊躇しているといった悩みや事例が集められそうにないという不安が話題となっていた。こうした状況からも、専門医資格の更新を躊躇する者や、ポートフォリオを書くための事例が集められないといった理由から更新しないまま資格を喪失した者が一定数いるのではないかと考えられる。

また、2018年4月より新専門医制度がスタートし、「総合診療専門医」の専門研修も開始されたが、総合診療や家庭医療を目指す専攻医の多くが「専門医像が不明確であること」「ロールモデルの不足」「指導医の質と数」といった将来的なキャリアに関連する事柄について不安を抱えていることが指摘されている。

今後家庭医療専門医を増やし、専門医のキャリアを支えていくためには専門医資格保持者の全体像を把握し、その特性を分析することが重要である。この結果を活かした専門医のキャリアサポートは有益であるとともに、専門医資格保持者の精神的な支えになると考えられる。また、専門医取得後のキャリアサポートの一環として専攻医への専門医部会としてのスタンスの提示ができ、将来への不安の軽減が図れると考えられる。

専門医部会キャリア支援部門としては、今後やむなく専門医資格を喪失する者を減らし、専門医の資格更新をスムーズに行うためのピアサポートといったより必要な支援を展開していきたいと考え、本調査を企画した。

<調査目的>

これまでの家庭医療専門医資格をめぐる取得や喪失の状況を調査し、今後の専門医のキャリア支援につなげることを目的とする。具体的には、ハイリスク群とその予備群を同定し、より効果的なサポートを提供する資料にする予定である。

また、個別調査を誰にどう行うべきかを考えるための基礎調査とする予定である。

<調査期間> 2020年11月～2021年5月

<調査対象者>

2020年度までに当学会認定家庭医療専門医を取得したことがあるもの（喪失者を含む）

<調査方法>

あゆみコーポレーションから個人情報を匿名化した上で以下の項目に関して情報を取得し、専門医資格の維持や喪失に関連する要素について分析する。

－調査項目

①匿名化したリスト（下記の項目を含む）

- ・年齢
- ・性別
- ・専門医取得時の医師経験年数
- ・取得時期
- ・専門医の取得要件
- ・資格保持期間
- ・更新回数
- ・保留の時期
- ・保留の理由
- ・喪失した時期
- ・専門医資格を喪失した人が学会をやめた場合はその理由（記録のある範囲で）
- ・修了プログラム（PG）
- ・指導医資格の有無
- ・更新に必要な単位取得状況

②2010年から2020年までの年代・性別毎の以下項目を含むリスト

専門医取得者数・更新者数・保留者数・喪失者数

<結果>

全体像

2020年度までに家庭医療専門医を取得したことがある者 922人

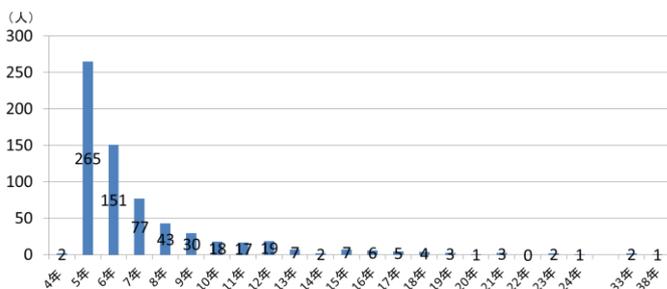
平均年齢（標準偏差）は40.32（6.43）歳（30-75歳）（※2021/2/10時点の年齢で算出）

男性680人（57.9%）、女性241人（26.1%）、欠損1人

専門医取得時の医師経験年数は平均7.17（3.65）年（4-38年）

内訳） 不明 256人 4年2人 5年265人 6年151人 7年77人 8年43人 9年30人 10年18人
11年17人 12年19人 13年7人 14年2人 15年7人 16年6人 17年5人 18年4人
19年3人 20年1人 21年3人 23年2人 24年1人 33年2人 38年1人

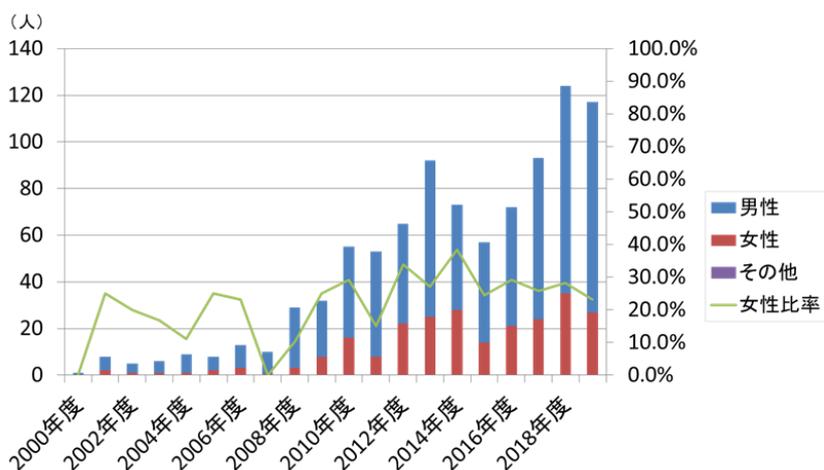
家庭医療専門医 666人の資格取得時の医師経験年数（不明のものを除く）



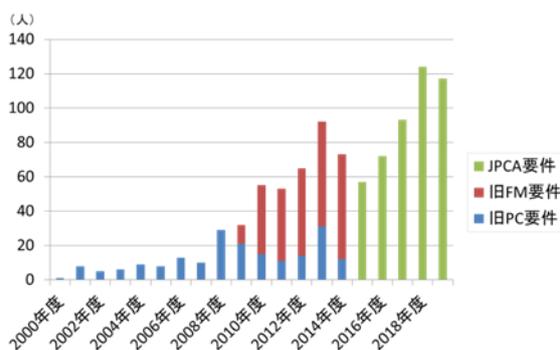
取得要件は旧 PC 学会要件が 193 人、旧 FM 要件が 266 人、JPCA 要件が 463 人
 資格保持期間は平均 5.88 (4.05) 年 (1-20 年) うち 10 年以上が 169 人 (18.3%)
 更新回数は 0 回が 482 人、1 回が 290 人、2 回が 131 人、3 回が 19 人
 指導医資格 あり 627 人 (68.2%)、なし 293 人

※ 2013 年以前の取得者については引き継ぎデータを元に算出されているが、以前の保留の記録がされていないなどで更新回数にずれが生じている可能性あり

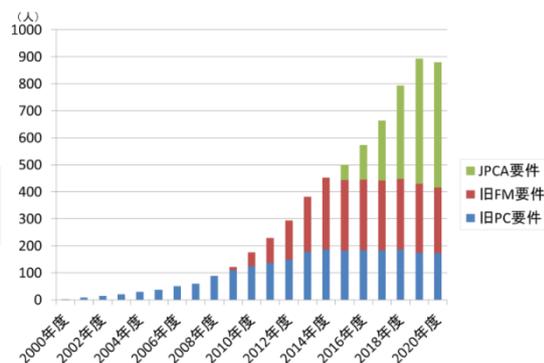
専門医新規取得者数の推移 (性別)



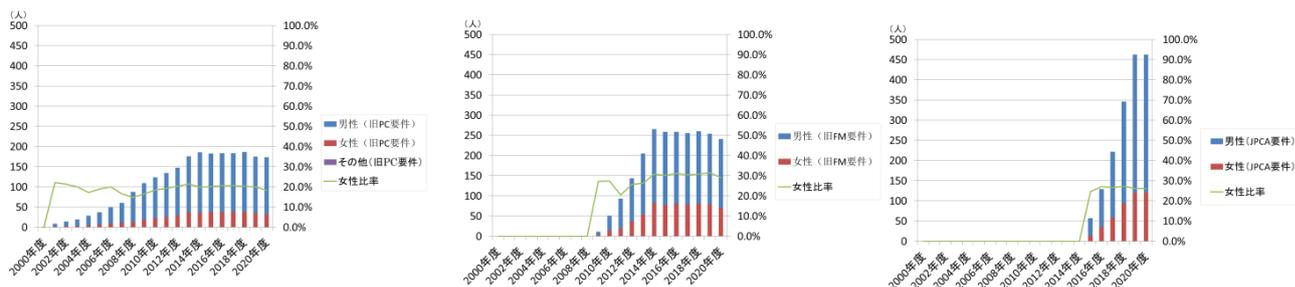
専門医新規取得者数の推移 (取得要件別)



専門医保持者数の推移 (失効者・保留者を除く)



取得要件別専門医保持者数の性別推移 (失効者・保留者を除く)



出身 PG の把握できた 756 人についてさらに解析を実施

これまでに家庭医療専門医を輩出してきた PG：142PG

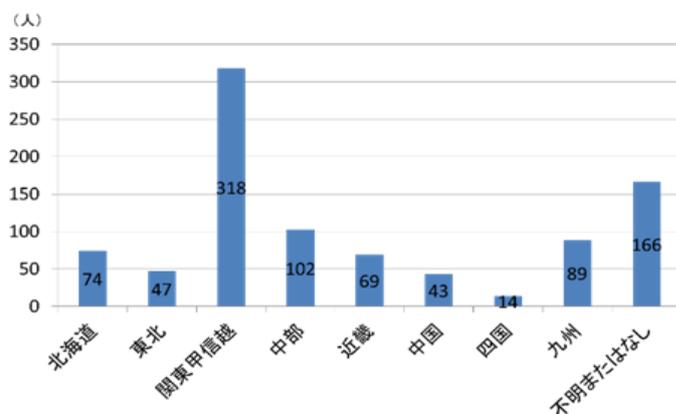
(登録 PG 総数：Ver1.0 68PG (2020 年 7 月 31 日時点) Ver2.0 257PG (2021 年 4 月 14 日時点))

概算で 43.7%の PG で専門医育成経験があると考えられる。最高育成数が 47 人。

育成数 30 人以上が 6PG、20 人以上が 3PG、10 人以上が 12PG

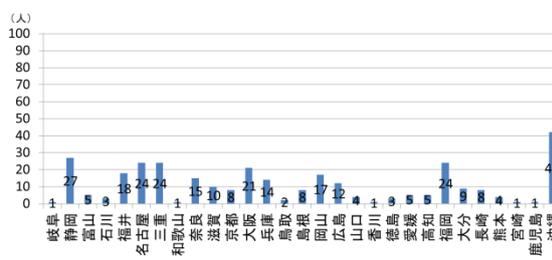
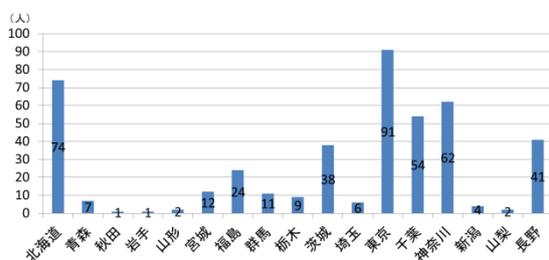
一方で、家庭医療専門医育成数が 5 人以下の PG が 3/4 を占めている。

これまでに生まれた家庭医療専門医 922 名の出身 PG (地区ブロック別)

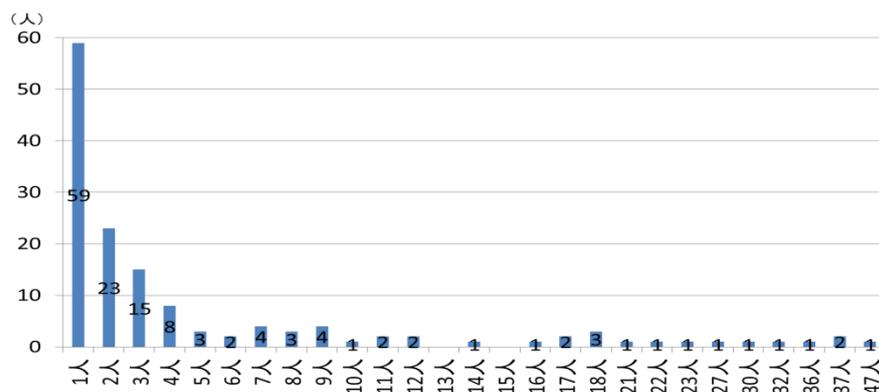


※ 複数以上の都道府県にまたがる PG については事務局の所在地でカウントしています

これまでに生まれた家庭医療専門医 922 名の出身 PG (都道府県別／東日本、西日本)



家庭医療専門医輩出数別 PG 数



資格喪失者・保留者の概要

資格喪失者・保留者は計 76 人。

資格喪失者は 22 人、保留者は 62 人（うち資格喪失者は 8 人）。

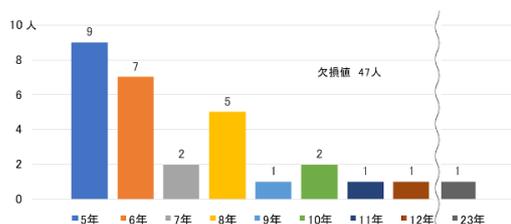
資格喪失者・保留者の平均年齢（標準偏差）は 43.97（6.061）歳（33-73 歳）

男性 44 人（57.9%）、女性 31 人、欠損 1 人

専門医取得時の医師経験年数は平均 7.45（3.53）年で 5-23 年。

内訳） 不明 47 人 5 年 9 人 6 年 7 人 7 年 2 人 8 年 5 人 9 年 1 人 10 年 2 人 11 年 1 人 12 年 1 人 23 年 1 人

専門医取得時の医師経験年数



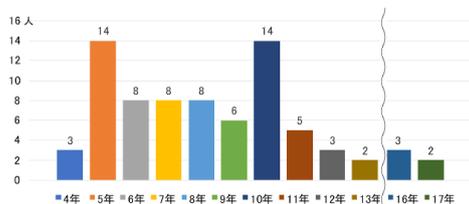
取得要件は旧 PC 学会要件が 31 人、旧 FM 要件が 42 人、JPCA 要件が 3 人。

資格保持期間は平均 8.46（3.16）年（4-17 年）うち 10 年以上が 29 人（38.2%）

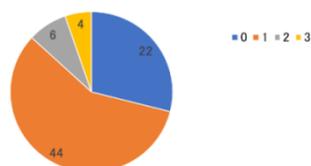
更新回数は 0 回が 22 人、1 回が 44 人、2 回が 6 人、3 回が 4 人

指導医資格 ありが 31 人（40.8%）、なしが 45 人

資格保持期間



更新回数



資格保留の理由（喪失者（8 人）を含む計 62 人につき解析）

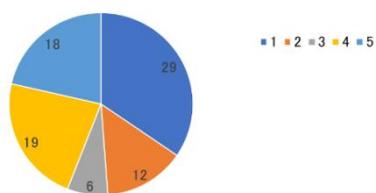
・保留理由

- 1) 更新審査の申請期日までに第 12 条第 2 項または第 3 項を満たせないとき。
（事例 PF の提出・取得単位）
- 2) 研究または臨床研修のために外国へ留学したとき、または現に留学中であるとき。
- 3) 長期の病気療養をしたとき、または現に療養中であるとき。
- 4) 産前・産後休業、育児休業または介護休業に該当する期間があったとき、または現に休業中であるとき。
- 5) 新型コロナウイルス感染症の影響による自動延長のため。
5) は、新型コロナウイルス感染症の影響により、2021 年 3 月末までで認定期限、及び保留期限を迎える場合は、自動的に、各認定期間を一律 1 年間延長される。

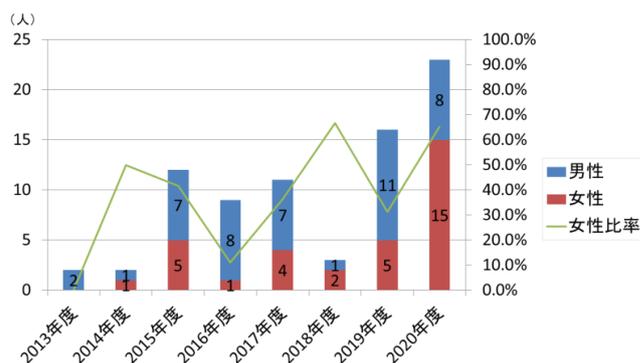
延べ数) 保留理由 1 : 29 人 保留理由 2 : 12 人 保留理由 3 : 6 人 保留理由 4 : 19 人
保留理由 5 : 18 人

内訳) 保留理由 1 : 21 人 保留理由 2 : 6 人 保留理由 3 : 2 人 保留理由 4 : 11 人
保留理由 5 : 0 人 保留理由 1,2 : 1 人 保留理由 1,5 : 7 人 保留理由 2,4 : 1 人
保留理由 2,5 : 4 人 保留理由 3,4 : 2 人 保留理由 3,5 : 2 人 保留理由 4,5 : 5 人

保留理由



保留時期と男女別人数の推移

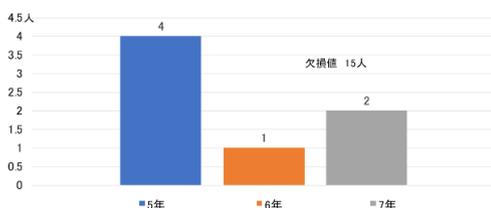


資格喪失者 (22 人) の平均年齢 (標準偏差) は 47.23 (8.29) 歳 (33-73 歳)

男性 18 人 (81.8%)、女性 3 人、欠損 1 人

専門医取得時の医師経験年数は平均 5.71 (0.88) 年で 5-7 年。(不明 15 人)

専門医取得時の医師経験年数
(資格喪失者22人)



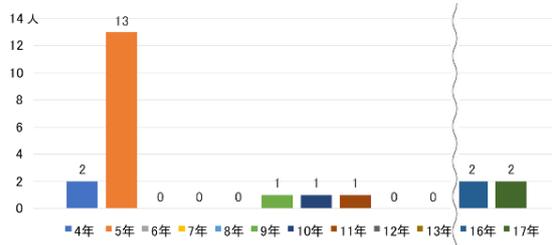
取得要件は旧 PC 学会要件が 12 人、旧 FM 要件が 9 人、JPCA 要件が 1 人。

資格保持期間は平均 7.77 (4.61) 年 (4-17 年) うち 10 年以上が 6 人 (27.3%)

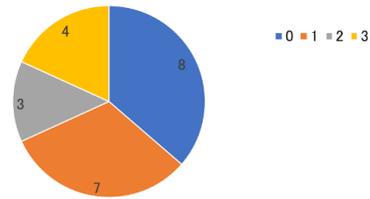
更新回数は 0 回が 8 人、1 回が 7 人、2 回が 3 人、3 回が 4 人

全員指導医資格なし

資格保持期間(資格喪失者22人)

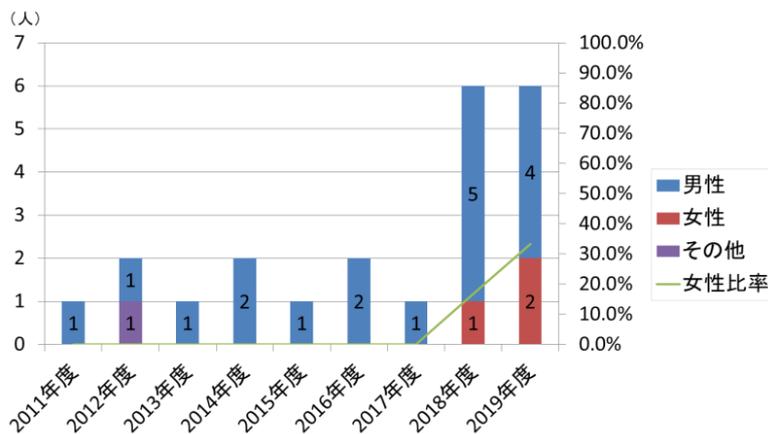


更新回数(資格喪失者22人)



資格喪失者 22 人の資格喪失時期と男女別人数の推移

※保留していた場合は保留開始時期が資格喪失時期とカウントされる



資格喪失者で保留をしたことがある人は 8 人。

平均年齢 (標準偏差) は 45.88 (6.43) 歳 (40-61 歳)

男性 7 人 (87.5%)、女性 1 人

取得要件は旧 PC 学会要件が 4 人、旧 FM 要件が 4 人。

資格保持期間は平均 8.88 (5.40) 年 (4-17 年) うち 10 年以上が 3 人 (37.5%)

更新回数は 0 回が 3 人、1 回が 2 人、2 回が 1 人、3 回 2 人

保留理由 1 : 6 人 保留理由 2 : 1 人 保留理由 1,2 : 1 人

資格喪失者で保留をしたことがない人は 14 人。

平均年齢 (標準偏差) は 48 (9.09) 歳 (33-73 歳)

男性 11 人 (78.6%)、女性 2 人、欠損 1 人

取得要件は旧 PC 学会要件が 8 人、旧 FM 要件が 5 人、JPCA 要件が 1 人。

資格保持期間は平均 7.14 (3.96) 年 (4-16 年) うち 10 年以上が 3 人 (21.4%)

更新回数は 0 回が 5 人、1 回が 5 人、2 回が 2 人、3 回が 2 人

<考察>

2021年まで家庭医療専門医を取得したことがある者は922人で平均年齢（標準偏差）は40.32（6.43）歳（30-75歳）、男性680人（57.9%）、女性241人（26.1%）だった。そのうちJPCA要件での専門医取得が463人であり、年々増加傾向である。全会員中、指導医資格を有しているのは627人（68.2%）で過半数を占めていた。家庭医療専門医を輩出してきたPGは142PG（登録PG総数はVer1.0が68PG、Ver2.0が257PG）、概算で43.7%に専門医育成経験があった。最高育成数が47人で、10人以上を輩出しているPGが21PG、5人以下のPGが3/4を占めていることが分かった。また関東甲信越出身の専門医は多い一方で、東北・中国・四国出身の専門医は少ない。よって、徐々に専門医数は増加してきているものの、学会としては出身者が少ない地域や専門医育成経験がない、もしくは輩出数が少ないPGに対して、地域やPGを超えたFaculty development等の働きかけが有効と考えられる。

また、資格喪失のハイリスク群・その予備群と関連すると思われる、資格喪失者・保留者は76人（8.24%）、喪失者は22人（2.39%）だった。男性が44人（57.9%）と過半数を超えていた。専門医を取得したことがある者全体の性別資格喪失者・保留者割合をみると、男性が6.5%、女性が12.9%と女性の割合が高かった。専門医取得時の医師経験年数は平均7.45（3.53）年で5-8年が多かった。資格保持期間は5年と10年が多かったが、これは更新のタイミングと一致している。10年を超えると資格喪失・保留の割合は減少している。更新回数は1回が44人、0が22人、2回以上更新している割合は少なかった。保留理由に関しては事例のポートフォリオ作成や取得単位が満たせていない、産前・産後・育児・介護休業等が多かった。

資格喪失者に限定すると男性の割合が18人（81.8%）と多数を占めていた。専門医を取得したことがある者全体の性別資格喪失者割合をみると、男性が2.7%、女性が1.2%と男性の割合がやや高かった。専門医取得時の医師経験年数は5年が多く、資格保持期間も5年が最も多かった。全員指導医資格は持っておらず、保留を経験している8人のうち、ほとんどの保留理由が事例のポートフォリオ作成や取得単位が満たせていないことだった。そもそも指導医資格を持つ動機がなかった可能性があるが、指導医資格の取得を促し支援することで専門医喪失を防ぐ可能性があると考えられる。

今回は更新年度のデータを集めていなかったため、更新年度毎に資格喪失・保留している可能性が考えられたものの、更新対象者の中での更新者数、保留者数、失効者数が把握できなかった。次回以降は更新年度のデータも追加して修得することで、更新対象者のうち更新できず失効したり保留したりする者の傾向をより正確に把握し、更新の際のハードルやそれを乗り越えるためのサポートを検討できる可能性がある。

<結論>

本調査によって、資格保留者・喪失者を含む現在の家庭医療専門医の動向の概要を把握することができた。家庭医療専門医の輩出に関しては、地域やPG毎に大きな偏りが認められ、その枠を超えたサポートの必要性が認められた。また、専門医資格を取得した後も継続的なポートフォリオ作成や単位の取得支援、産前・産後・育児・介護休業等の取得者のサポートが重要だと示唆された。今後、実際の資格喪失者（22人）へ個別に専門医取得理由や資格喪失理由等を調査したり、資格保留者・保留経験者へ保留理由や必要な支援等を調査・検討したりすることで、さらに専門医資格を喪失する者を減らし、専門医の資格更新をスムーズに行うためのピアサポートといったより必要な支援を展開していきたい。

文責：合田建/村田亜紀子